

第四章 予（よ）は亦（また）舟に乗って鹿門（ろくもん）に帰る

景雲一（七二二）年の浅い春。

「ここで別れよう」。

張子容が言ったのが耳に入らなかったかのように、「門を潜った先に、確か、右の方だったけれど、酒を出す店があったように思います。知っているでしょう。どうですか、ちよつと行ってみませんか。もう四、五年にもなるから、店の様子も変わっているかも知れないけれど、ひよつとしたらなくなっているかも知れないけれど、でも、とにかくそこまで行ってみませんか」。

前に進もうとする孟浩然の袖がぐいと引かれる。

「今日は変だ。いつもの君らしくない」。

「そんなことないです。いつも通りです。ちよつと行つてみたらどうだろうか、ふと思ひ付いただけなのです。ですからいいではありませんか。でも、君がそのように強い調子で言うのですから、もしかしたら、僕は変なのではないか。たぶん、そうなのでしょう。だつてこのようなことになつて、いつも通りだつたら、かえつてその方が変ではありませんか」。

孟浩然は袖を引き離そうとする。張子容の手は固く握んだまま動かない。妙に饒舌なのは渡し場で呑んだ酒のせいだけではない。

「ここまでと約束したではないか。それも、一度ならず二度も変えた約束です。またなのかい。もううんざりだ」。

苛立ちを隠さない張子容もいつもらしくない。

「そうです、そうです、またです。一度、二度、これで三度です。ちゃんとわかっています。もううんざりでしょう。全く君の言う通りです。だけど、ここまで来てみたら、ちよつと小腹もすいてきたことだし、あの店も久しぶりだから、いまもやっているのかどうか様子を見るだけでも悪くないのでは

ないかと、いや何となくふと思いついただけなのです。それだけのことなのですから、別にどうということもないでしょう。約束を破るとか、信義にもとるとか、そのような大きなことではないのです。本当にほんのそこに行くだけです。確かに、僕は、ここまでと言いました。僕が言ったのですから、きちんと認めます。だから、その通りにすればいいだけのことです。わかっています。別に、それをひっくり返してどうかするとか言っているのではないのです。だって、その門を入って、そのすぐ先なのです。あそこまで行ったところで、こことあそこと、変わるものではないでしょう。ずっとここにまで来て、ほんのあそこです。約束がどうかこうとか、目くじらを立てなければならぬものでもないでしょう。ここはどうか大らかに頼みしたいです。どうでしょうか」。

無暗と言葉を並べる。

張子容は嘆息し、

「君が何だかんだと言うから、ここにまで来たのです。ここまで来てしまっ

たら、君の言うその店とことでは、距離においては大差ないでしょう。それを争っているではありません。店に行けば、君はまた酒を呑むのだろう。それだって大差ないと言ったら大差ないのだろうけど、大差ないことを切りなく重ねて行くつもりなのかい。すでに大きな差になっていると、君も思わないかい。三度目はないとしようではないか。ここで別れよう」。

「はい、わかっています。ここだと約束しました。でも、ここには存外早くに着いたではありませんか。別れる別れると、あくまで一刻を争わなければならぬものなのでしょうか。ちよつとそこに寄るだけです。腰を据えて、その店に何日もいようというではありません。ほんのひと時です。酒がもう嫌なら君は呑まなくていい。いや、僕だって呑まなくてもいい。だけど、ほら、考えてみてくれませんか。お腹に温かいものを入れた方が、僕だってこれから山に帰りやすくなるでしょう。そうは思いませんか。その店を出てから、僕はとぼとぼと一人で道を歩いて、その後で、また川を渡るのです。川は当然、吹きさらしです。舟を降りて、またとぼとぼと一人で道を歩くの

です。そのうちに日が暮れます。暗くなれば、この季節、山道はまだまだ冷えます。ここからそのようにして帰って行く僕のことを少しは思ってくれてもよくはないですか。どうだろう、酒もやはり少しはあればいいとは思ってくれませんか。だから、あそこの店に寄ってくれませんか」。

張子容はいよいよ呆れたように、

「川を渡って山に帰るのが大儀であるかのように言うけれど、それは、君がここにまで来てしまったからではないのかい。寺の門で十分だと私は思っていたのです。だけど、漁梁の渡し場までと君が言うものだから、ならばそこでと約束して、渡し場にまで来てもらいました。それが最初の約束です。渡し場に着的いたら、舟が出るまでしばらく間があったから、寺では呑めない酒で別れの盃を交わそうではないかと君が言うので、酒店に入りました。いざ舟が出るとなつて、君はどうしたことか無理やり舟に乗り込んで来た。押し返すのもどうかと思つて、こちら側の岸でと、二度目の約束をした。岸に着いたら、帰りの舟はすぐ出ないからとか理由を並べて、襄陽の城門が見える

ところまでと、また約束を変えた。もうそれだけしたら十分だとは思わないのかい。さあ、ここで別れよう」。

袖を掴んでいた手に力を入れ、ぐいと孟浩然の体を押しやる。

よろけながら、

「その通りです。君の言う通りです。だけど、今日は特別だと思ってくれないかい。実際に特別でしょう。一度言い出したら変えない君の性格は僕だっ
てわかっています。約束を幾度も変えて、君には悪いと思っています。けど、もうこれで本当に本当に最後なのです。もう一度だけ曲げるのを許してはくれませんか。門から入って本当にすぐ近くなのです。ここからだって見えるくらいのところですよ。だからいいでしょう。今日は特別なのですから、頼みます。この通りです」。

手を揃えて拝む。

「一体どうしたんだ。今日の君は全くわからない。寺の門で、さらりと右と左に別れて、それでよかったではないか。私は家に帰り、君は寺に戻る。喧

嘩別れをしたとか、二度と会えないとか、そういうことでは全くないでしょう。今日がそんなに言うほど特別ではないのです。またいつだって会えるでしょう」。

「君が山を下りるのが特別ではなくて、何が特別なのですか。だから」。

くどくどさらに言おうとするのを張子容は遮り、

「あまりにしつこいと、本当に喧嘩別れになってしまうぞ」。

「怒ったのかい」。

「怒りはしない。むしろとまどっている。君はどうかしている」。

「ええ、どうかしています。僕は変です。自分でもわかっています。だって、二年近く続いたことがこれで終わってしまうのですから」。

孟浩然は不意に涙ぐむ。

号泣したいのがいまの本当の気持ちなのだろう。張子容との日々が終わるのは悲しい。張子容が一緒だから鹿門山にいられた。一人になるのは怖い。

張子容は気を静めるように大きく呼吸してから、

「物事で終わらないものはありません。二年近くも続いた幸いを思うのがいいではありませんか。何よりも君のお蔭です。感謝しています。私だって、泣きそうなのは君と変わらない」。

孟浩然は張子容の顔を見られず、身を振って空に目を向ける。胸に鹿門寺での歳月が去来する。

鹿門山に登った詩を、鹿門寺へと誘う手紙に添えて張子容に送ったのは景竜三（七〇九）年の夏だった。その詩は、全く思いがけないことに、完成までに半年を要した。

張野人とともに鹿門山を下って小屋に帰り着いたときまでに、最初の詩は概ねできていた。山にいる間に、句が次々に浮かんで来た。どうなってしまうのかと、自分で怖くなるほどの勢いだった。無秩序に出て来た句を拾い集めて、順序立てて並べれば詩の形になった。詩を作るとは、こういうこと

でいいのかと、呆氣に取られる思いだった。しかし、怖さは薄れず、思いも混乱していたので、張野人には告げずに帰った。もとより、詩を作るのはいつでも速い。褚先生の学舎で、先生が出す題に対し最も速く応じるのが孟浩然だ。それに次ぐのが孟四で、二人は速さでも出来栄でも他の弟子と格段の差がある。青巖庵で七賢人を気取った戯れの詩を作るのでも、孟浩然が二人の友人より速く、必ず二人を感心させた。

翌朝に筆を執って浄書してみると、それなりの出来栄であると思えた。山中で浮かんだ句は他にもたくさんあり、なお怖さもあって、四、五日の間は手元に置いて慎重に手直しをした。嵐の中で見た一筋の道へ、これで歩み出しているのかどうか、自分で納得できるまでは張野人には見せられないとの思いだった。

何度も書き直して、いよいよこれでよしと、小屋に持って行くと、「ほほう、いかなることになりましたかな」と笑顔で迎えてくれた。一瞥すると顔をしかめ、「何のことやらさっぱりわかりませんな」と突き返した。その様子にい

ささかむつとし、「ちゃんと見て下さい」と、特に工夫した部分を指差した。張野人は大欠伸をし、「これは何ですな、いま思い出したのですが、昨日だったですか、あつしが糞を垂れたついでにひり出したのと同じですな。それを坊ちゃんはいったいどこで拾ったのですかな。ああ、臭い、臭い」と鼻をつまんだ。「叔父貴の句など拾っていません。僕が考えて何度も直したのです」。「直したですと。それは駄目だ。糞を捏ねくりまわしてはいけません」。その瞬間に楊義姉の言葉が甦った。「巧んだ上にまた巧むから、変なものになるばかり。しようがないこと」。いつまでも三姉妹の日々を懐かしんでいるようではいけないと、そのことも忘れていた。

小屋からの帰路に、詩稿を投げ棄て、巧まずに新しい詩を作ろうとした。しかし、作ろうとすると、棄てたばかりの詩が浮び出て来て、結局はそれをいじくり回しているのだった。幾度棄てても同じになった。詩を作る鑄型が自分に組み込まれているかのようだった。劍の型は自分のものにできなかつたのに、楮先生の必ずしも素直な弟子ではなくとも、貢挙に合格するため、

あるいは官界で出世するために必須の道具である詩賦を使いこなす技の型は、身に備わっていたのだった。

十日余り苦しみ、最初の詩が、大欠伸をし鼻をつままなければいけないものであると自分にもわかった。孟浩然の脳裏には、張野人とともに歩いた情景がくつきりと刻まれている。典雅な字句であれ陳腐な字句であれ、何かしらきつかけがありさえすれば、鹿門山の記憶はまざまざと呼び起こされる。鹿門山に同行していない者はそうではない。典雅であつても陳腐であつても、技によつただけの詩は退屈で臭いだけだ。桃花源への道しるべが、逆に桃花源への道を塞いでしまうようなものだ。

これでは一筋の道は歩めない。あれはやはり幻にすぎなかったのか。自分にはできないことだと思ふと、妙に安堵した。鹿門山の詩は放擲し、褚先生の学舎でいつもよりも身を入れて学ぼうとした。先生は感じるどころがあつたのだろう、非常に嬉しそうだった。これで本来の自分の為すべきことに立ち返つたと、自分を納得させていられたのはほんの数日間だった。何ともや

るせなく、そして悔しかった。

鹿門山において、張野人は明らかに挑発した。詩が作れるのか、それも謝靈雲を超えるような詩が作れるのかと。張野人には、一筋の道のことを話していない。張野人はそちらへと導こうとし、孟浩然にもそちらに行きたい気持ちがあつて、鹿門山に行くことになった。あの絶好の朝がありながら、一筋の道へ一步も踏み出せずに諦めるようでは、この先自分は何もできないだろう。

猛然と謝靈雲の詩を読み返した。山水を言葉でいかに切り取るのか、懸命に習った。謝靈雲を超えるにはまず謝靈雲にならねばならない。一カ月ほどして新しい詩ができた。「ほほう、これは何ですな、文字の手習いですか。お手本は、あつしを喜ばせようと、謝靈雲の詩を選びましたな。しかし、よく見ると、謝靈雲にしてはかなり不出来ですな。謝靈雲といえど、ときには気の抜けた詩も作ったのでしようかな。これはたぶん贋作でしょう。この程度のもに騙されてはいけません」。張野人の甲高い笑い声に、孟浩然是顔

を赤らめてすすごと帰った。

褚先生でも、謝靈雲でも、誰かに習えば人真似で自分の詩ではない。初めは真似るしかないのだが、上辺を真似るのだけでは、及ぶことさえできない。さらに十日ほど苦しんで、謝靈雲の詩にあつて自分の詩に欠けるものがあるとなつた。謝靈雲の詩の奥底深くには得体の知れぬ恐ろしいものがある。謝靈雲という人だからこそそれが存在する。真似するものではない。

もとより謝靈雲とは程遠い。ならば、まだしも阮籍であろうかと、今度は阮籍の詩を読み返した。一カ月ほど格闘して、先人は遙か彼方であると思ひ知らされ、くたくたになつた。再びあきらめかけ、詩について考えるのも嫌になつて、どうにか踏みとどまる場所を見出した。謝靈雲だ阮籍だと考えず、詩の奥底深くとも言わず、ただ見たままを單純に叙述してみたらどうなのか。なかば自棄になつてそのように思ひ付いた。楊義姉の詩が手本になりそうだった。三姉妹でいてはならないとの自制が、その思ひ付きを長く妨げていた。

楊義姉に習うのは、謝靈雲や阮籍よりも存外難しかった。どうか詩の形にしてみても、これでいいという自信は持てなかった。楊義姉に笑われてしまう気がした。張野人の小屋からしばらく足が遠のき、すでに年が改まって春になっていた。突き返されてまた一からやり直す覚悟で、張野人に見せに行った。張野人は膝を叩き、「これなら、桃花源への道の入り口を指し示すくらいにはなっていますかな。道案内としてなら結構な出来と言ってもいいでしょう。しかしですな、入り口がわかって、桃花源には行けなかったのですな」。

自分でもまだまだだとわかっていた。少しばかりの希望は持てた。しかし、この先、どうしたらいいのか、考えられることは全て尽きていた。

春が終わり夏になり、考えるのに倦み、自然と忘れたようになっていたある日のこと、野に立つ父の隣にふと並んでみた。かなり以前にも同じようなことをした。そのとき父の心はわからず、わからないままに、父はこうなのだ、もう気に留めなくなつた。南園の人々は皆、父のことなど気にしてい

ない。

父がしている通りに岷山を見た。父の心はやはりわからなかった。父は何も考えていないのだろう。それなら、わからないのは当然だ。こちらも一切の思念を追い払ったならば父と同じになれるようか。そのように意識する限りはそれは不可能だ。父の心を知ろうとすれば父の心は決して知れない。果てしない堂々巡りだ。それに倦み疲れたところに、不意に岷山が消えた。おやとも思わずにいると、自分も消えた。消えたとも思わずにいると、自分の代わり、どこかからか何かが来た。何だろうかとも思わずにいると、父が岷山になっていった。「ほら、来た」と岷山が言った。その瞬間に母がいつものように背中を叩いた。父は動き出し、母と畑を耕し始めた。孟浩然是元の場所に立っていた。父のもとへと駆け寄り、「いまのは何だったのでしょうか」と尋ねた。父は手を止めずこともなげに言った。「興だ」。

瞬時に孟浩然是覚った。あの日にこの朝だと思っただけのは「興」が来たからだ。あまりの単純さにおかしくなって笑った。「興」が来たままでよかったの

だ。孟浩然是、畑の中に立って一篇の詩を吟じた。

清曉因興來　清らかな曉に、興がもととなつて来るところとなりまし

た

「おまえの詩か」。「父上が教えて下さったのです」。孟浩然是急いで家に帰つて詩を書き留めた。

張野人は腕を組んで唸つた。「驚きましたな。十年、いや二十年、ひよつとしたら三十年も後になつてできるような詩をどこから取つて来たのですか」。父上に教えていただいたのです。「成程、そうでしたか。それならわかります。しかし、これだけ先に行つてしまうと、これから追い付くのが大変でしょうな」。「どうしたらいいでしょうか」。「確かなのは、進まねば決して追いつかぬということだけでしようかな」。

一筋の道へ第一歩を踏み出せたようだった。そして歩み続けなければならぬと知つた。詩がいよいよ怖くなり、足が竦んだ。試験に合格する手段、あるいは社交の道具ではない詩があると、それに囚われたならば、恐ら

くまともには生きられない。七賢人にしても、謝靈雲にしても、みな貴族だった。明日の糧の心配とは別のことに苦しみ、それで独特の詩を作った。二人とも稀有な存在で、陶淵明はさらに稀有な存在だ。明日の糧を得るために奔走して官職を獲得したのに、それを捨てて郷里に帰った。陶淵明の精神は強靱だ。自分は心を強くしようとして失敗した。直ちに明日の糧に困る状況にはないにしても、南園は傾きつつある。その現実から逃れて、詩にうつつを抜かしていいはずがない。しかし、歩み出したならば戻れない。

幻のような一筋の道だ。南園の現実を置いていたのでは歩けない。現実から離れすぎでは自分が幻となってしまう。世の外に出るのが望みではない。幻と現実の微妙な兼ね合いのところに一筋の道はあるのだろうか。だから、張子容を誘う必要があった。張子容が近くにいるとすれば、微妙な位置にとどまっていられる。

より現実的な理由もあった。張子容と鹿門寺に籠って試験のための勉強に集中したいと言えば、南園の人々を納得させられる可能性がある。張子容に

は父親のもとをしばらく離れた方がいい事情がある。父子間の葛藤で張子容は窒息しそうになっている。

手紙を送っても張子容からの返事はすぐにはなかった。漁梁の渡し場で落ち合つて鹿門寺に向かったのは夏の終わりだった。張子容は見るからにやつれ、寺の最も奥まったところに至るまで、ほとんどものを言わなかった。

そのときまでに、孟浩然の方は、簡単ではなかったが、鹿門寺に籠ることがほぼ容認されたようになっていた。南園の主である祖父の孟漲は長く病床にあり、長男の孟敬行が代行となっていた。孟敬行は何に対しても「父上の御意向を伺つてみないことには」と判断を回避するばかりで、南園は統率がきかなくなつて行つた。小さな煙りがあちこちで生じ、それが炎となつて燃え上がるのを防ぐために孟大が動き回つた。大きな体を曲げて懸命に頼むと取り敢えずはおさまつた。そのような孟大に面倒をかけるのは気が進まなかつたが、他に手はなく、鹿門寺にしばらく籠りたいとの希望を孟大に告げた。「前に約束した通り、君が迷つたときに支えるのが俺の仕事だ」と、一緒に

孟敬行に話をしてくれた。予想通りの返事だった。「父上の御意向を聞き、楮先生にも伺ってみななければなるまい。わしには何とも言えない」。それで終わりだった。孟大と一人で楮先生にお願ひに行つた。「君等二人の考えは尊重したい。張子容君が一緒ならばよしとしよう」と複雑な表情ながらも認めてくれた。

どこで聞きつけたのか霍大叔母がすぐに来て、「ろくでもないあの漁夫風情と付き合っているから、ろくでもない考えに惑わされたりするのだ。全く困つたものだ。駄目だとあれほど注意したのに、聞かないからだ。今度は絶対に許さない」と孟浩然を睨みつけた。大叔母は、「いつも甘くしているから、次々に我儘を言い出して切りがない。もう許してはいけない。まるつきり示しがつきやしない。今度こそはびしつと叱つて下さい」と、孟敬行にも噛み付いた。「これはどうも弱つたな」と孟敬行は息子にぼやいただけで何もしなかつた。

これに限らず、霍大叔母は孟敬行に何かにつけて噛み付くので、口さかの

ない若い連中は、「噛み付き蛙」の仇名を献上した。凶体が一層大きくなった大叔母に似合った仇名だ。孟敬行は鈍感なのか小心なのか、大叔母に噛み付かれても、「父上の御意向を伺ってみないことには」と、いかなる問題もそのまま放置してしまふ。大叔母は「だったら、この件はこつちでうまくやらせてもらいます。病床の伯父様の気に障るようだったら、言っておくれ。どうとでもするから」と強引に事を進めることもある。そうなると霍氏の夫の孟振の出番で、孟振は孟漲にしばしば汚れ役を命じられて来たから、様々なことに手馴れている。孟振は横柄な皮肉屋で人望がない。近頃はそれを意識して、鷹揚に振る舞おうとしている。孟浩然にも、「君の気持ちはわからないでもない。他ならぬ君の希望であるのだから、できることなら叶えてやりたいと思う。しかし、君も立派な年齢になつてきているのだから、わきまえなければならぬものがあるというのも十分に知つているだろう。世間というものがある。わしは君を信頼している。よく考えてくれると確信している。敢えて一つだけ言うと、褚先生のお立場があろう。君はよくよく先生のことを考え

なければいけない。あれほど可愛がって下さっているのだからな」と諄々と諭すように言った。

それは孟浩然の気持ちをごらつかせた。学舎の運営は、傾きつつある南園にとつてなかなかの負担になっている。褚先生は二十年以上にわたつて弟子を指導して来た。さすがに貢挙の合格者を出さずについては面目が立ち難い。南園老の血判状があるから、病床の孟漾もその弟たちも学舎に対して異議を唱えることはしない。その下の世代になると別だ。孟振は、自分の息子を誰一人として学舎に入れてもらえなかつたこともあつて、学舎を嫌う急先鋒の一人だ。孟振は、学舎に通えない甥達を自分に引き寄せようとしている。とくに、孟大の弟の孟二に目をかけている。孟大は南園老の曾孫として最初に褚先生の弟子となり、孟二は逆に弟子になれなかつた最初の曾孫だ。孟二は、南園老に才能なしと見切られ、実際に成長するにつれて愚鈍といわれても仕方のない振る舞いをし、冷たい仕打ちも受けて来た。孟振がそれをかばい、辛(しん)の家から評判のよい娘を嫁としてもらうために力を尽した。その嫁

を妻とともに何かと引き立てている。孟大の妻にしたのとは大違いだ。

学舎はいまの南園には不相応な存在でも、誰かが首尾よく官人になれば事情は一遍に変わる。学舎を即座に廃止せよとまでは孟振も言わない。声高に言うのは孟敬規ただ一人だ。孟敬規は孟敬行の末弟だ。学舎は叩き壊せと言うだけでなく、孟敬行は無能だと言い、誰に対しても、何に対しても、憚ることなく難癖を付ける。普段はごろごろ寝てるくに働かず、酒が飲めそうなときだけ人に先んじて出て来る。酔うと手あたり次第にからむ。褚先生の袖を不作法に掴んで、「物のわかった顔で鹿爪らしく『論語』を読むのも、間拔け面で大鼾で寝るのも、その間に畑を耕さないことでは同じだ。我輩は南園の鼻つまみ者。それは認める。『論語』を読む連中だってやはり鼻つまみ者だ。お互いに競ってこの南園を滅ぼそうとしている。我輩もまだ頑張る気だが、ここまで南園を成り下らせてくれたことに、我輩は先生に心から感謝します」。褚先生は全く取り合わないが、孟敬規はしつこくからむ。自分が直接からまれるのは不愉快でも、孟敬規の言い分は、蔭では案外支持されていて、霍大

叔母も「このままでは南園は本当に滅びるしかない。あんたはもつともつと言った方がいい」とそそのかしている。

その孟敬規が、夏の盛りに行われた水路の総浚いの後で、酒に酔っているからんだ末に、霍大叔母に「あれは面倒だから鹿門寺に入れてしまった方がいい。褚先生が教えた愚にもつかないことを、坊主どもが薄めてくれるやも知れぬ。あれは鹿門寺に放り込むのが得策だと思ふ」と言った。むろん霍大叔母は「だめだ。勝手は許さない」と答えた。孟敬規は「あれ一人くらいはいいだろう。あれは一人棄てたつていい」。「一人許したら歯止めがきかなくなる」と二人は言い争った。孟浩然は聞こえぬ振りをしてその場から姿を消した。

その翌朝、学舎に向う孟浩然の前に、宿酔の臭いをふんぷんさせて孟敬規が立ちはだかった。「どこに行くのだ。方角が違うだろう。我輩の前をいつまでもちよろちよろするな。目障りで仕方がない。とつとと鹿門寺に行け」と、大声でわめいた。「いますぐにとはいかかないです」。孟浩然が言いかけると、

「張子容を待っているのか。だから駄目なのだ。我輩がいま抱えて連れて行ってやる」。孟浩然の体を持ち上げようとした。ごろごろ寝てばかりの孟敬規にそんな力があるはずもなく、尻餅をついた。

そのようなつまらない事件もあつたせいで、孟敬行は面倒とばかり、「この件はあやつの父親に任せる。わしはもう一切関与しない」と言った。もともと孟敬行は何もしていなかった。孟浩然の父はいつものぼんやりとした顔で「好きにしろ」と言ったので、一応の決着となつた。霍大叔母は「寺に籠ると言つても、あちらで飯を食わしてくれるのではないのだろう。この落ち目の南園に困つた物入りだ。ろくなことが起こらない」と不平を言い続けた。

ともかく孟浩然は鹿門寺に入れるようになり、蝉時雨のもと、張子容とともに寺の奥にまで歩んだ。案内の寺僧が「ここは寺のはずれで何かと勝手が悪く、しかも手狭です。それが、お勉強をなさるにはかえってよいと御判断されるのならば、いつでもお使いいただいて結構です」と、小さな古い精舎へと導いた。まだ中も見ないうちに、張子容は「たったいまからでもよろし

いでしょつか」と言った。張子容が口に出すのは心にすでに決めたことだけだ。

張子容の父がすぐに飛んで来た。始めは怒っていたが、息子が頑として動かないのを見て、「しばらくの間なら許しましょう。ただ、必ず帰ると、それだけはどうか約束してくれ」と、息子にすがって泣いた。「時が来れば必ず帰ります」。張子容が答え、父は肩を落として下山した。

鹿門寺での暮しが直ちに始まった。必要な食べ物などは、孟大のとりなしで、従弟の孟馨と弟の孟浩然が届けに来た。孟馨は孟浩然に二ヶ月遅れて生まれ、何かと耳目を集める孟浩然の蔭で呑気に成長した。勉強はそこそこできるが、他の子と競うことはない。周囲に逆らわず、結婚してすでに子供もいる。

孟馨と弟は、ほぼ十日ごとに荷を担いで鹿門寺に来るようになった。孟馨にとつては面倒なことというよりは、楽しみであるようだった。朝に来て夕方近くまで寺でぶらぶら過ごす。南園のことやら、町のことやら、都のこと

やらを、のんびりとした口調で話す。弟は兄より八歳年少で、兄妹三人の家で、姉はすでに嫁に行き、兄が寺籠りとなつて寂しいことから、孟馨に必ず付いて来る。口数が極めて少なく、年長者の三人が話すのをいつも黙つて聞いている。

鹿門寺での日々は、ただ一つを除いて、これ以上は望み難いものだった。その一つが、肝心の一筋の道だ。一筋の道はいきなり疾走できるような道ではないと考えていたから、始めのうちは、詩というものを第一とする状況に自分が身を置いているということに満足できた。いずれ、確かに一筋の道がそこにあるとわかるようになって、自分なりの詩境が開けて来るだろうと思つていた。日常坐臥の全てが一筋の道へと繋がつていゝと思えた。若い僧侶と修行の真似事をし仏説を聞くことも詩と無縁ではない。何よりも張子容という友がいる。張子容とあらゆることを語り合い、毎日が楽しくてならなかった。

鹿門山の道もすばらしかった。寺の奥から山に入つて行くと、張野人も一

緒に酒を酌み交わした山の精の仲間にも自分も加えてもらえそうな気がした。時刻によって、日によって、季節によって、山の道は千変万化した。そのような山の道で、不意に、猛然と詩を作りたくなる気持ちに襲われるときがある。「興が来た」と感じるのだが、何かわからないが、同時に、詩を作るのを阻むものが行く手にあるとも感じる。ここで詩を無理に作っても、張野人に一笑のもと棄てられてしまうようなものにはかならないだろうから、次のよりよい機会を待とうと思うと、興なるものはふっと消え去るのだった。ときに、張子容が山中の道を同行してくれると、特別に強く感じる何かがある。このようなときにこそ詩を作って、同じ思いを張子容と分かち合おうとする、今日はこのままでしておく」と張子容は必ず帰ってしまふのだった。

いまでもなくても、詩はいつかできるだろうと思ううちに、いたずらに歲月は流れて行った。ふと気づくと、鹿門寺に籠ったのは、一筋の道を歩むためではなく、ただ張子容とともに暮らすためであるかのようになっていた。それでも、不満がないほどに、張子容のお蔭で鹿門寺の日々はすばらしいもの

だった。

張子容には教わることが多かった。張子容は己に対して厳しい。書物は一度で記憶すべきだと言う。書物を繰り返し朗誦して徹底的に覚え込ませる。先生の教授法を、孟浩然是苦手としている。読んで理解するのは楽しいが、覚えるために読むのは苦痛だ。「だったら、一度で済ませればいいのです。もう二度とこの書物は読めないと思うのです。何事も二度とはないのですから」。張子容が言った通り、どれほどに望み難い日々も、その一日一日は二度とないもので、永遠に終わらないものではなかった。

「では、これで行く」。

すっぱりと断ち切るかのように張子容は言う。

孟浩然是それまでに心を半ば決めかけていたのに、

「どうして、終わりがあると決めるのですか。終わりなどないとしてもいい

ではないですか。それではいけませんか。永遠に終わりは無いとして、物事の道筋を考えてみたらいいのです。それで悪いことはないはずですよ。きつと辻褄が合います。僕はそうだ考えます。終わりというものが無いとまず決めて始めるのです。すばらしいと思いませんか。僕はそれでいいと思います。どうして、これまで気が付かずにいたのだろう。それでやってみましょうか」。口から出るままにまくしたてる。

張子容は懽然として、

「どうしたのかい。何を言い出したのかい。急に酔いに襲われたのかい。だったら、ここから歩いて、舟に乗り、川の風に吹かれて、思いつきり頭を冷ますといい」。

「僕は酔っていません。頭はとてもすっきりしています。だから、今まで誰も考えて来なかったことを、こうして考え出そうとしているのです。どうして、終わりがあるなどと人々は思っていたのでしょうか。むしろその方が不思議になって来ました」。

張子容は首を振り、

「君は、もしかしたら、あの叔父貴の話っぷりを真似ようとしているだけなのかも知れないけれど、叔父貴と君とはまるで違う。似合わないことはしない方がいい」。

「違います。叔父貴の真似をしたくても、僕にはできないことはわかっています。だって、叔父貴は、人生の辛酸というようなものをさんざん嘗めて来たのでしょ。この僕と来たら、御覽の通り、辛酸と無縁です。ついこの間まで、南園でのほほんと暮らしていて、近頃は鹿門寺に籠って呑気にして、僕が生まれてからこの方、したのはそれだけです。何もしていません。何も知らない僕が、叔父貴のおかしな話っぷりだけ似せても全く意味がありません。わかっています。僕はどうせその程度の者です。全くもって話になりません。僕の言うことなど、どころんでも、駄目なものは駄目です。君に聞かせられるものは皆無です」。

「今度は急に自分を責めて、どうしたのかい。君は動揺しているのかい。君

が話したいというのなら、永遠に終わりが無いという説を、少しの間だけなら付き合ってもいいでしょう。特別に急がなければならぬ理由は私にはないので、手短かにしてくれるのならば」。

別れを惜しむ気持ちは友にもあるのだろう。

「つまりです、終わりが無いという考えは、すぐに捨て去らねばいけないほどには悪くないような気がします。たぶん僕はまだよくわかっていないので、うまく言い出せないのですが、どこか糸口があれば、するすると言えるようになるのだろうと思います。いまそれを見出そうとしているのですが、それで、君としては、例えばどのあたりから聞きてみたいですか」。

孟浩然は何とかして話の穂を継ぐとする。

「特に聞いてみたいことがあるのではありませんが、どうでしょう、まずは、一つでいいから終わりが無いものを何か挙げてみてはくれませんか」。

「成程。それだったら、一つと言わず、いくらだってありますとも。例えば、最も身近なところを言えば、ほら、龐徳公の不老長生術です。龐徳公はいま

も鹿門山のどこかで生きていて、これからも永遠に生き続けます。僕らだつて、龐徳公にお会いして、その術を教えてもらえるのならば、同じようになれるでしょう。そうすれば、僕らの鹿門寺での暮らしも永遠に続くでしょう。いま終わらせなくてもいいのです。そうでしょう」。

「君は真面目に言っているのかい」。

「嵇康も、養生の理法を得るならば数百歳は少しも難しくないと言ったではありませんか」。

「事実としては、嵇康は若くして刑死しています。龐徳公は確かに仙薬を求めて鹿門山に入ったのですが、その後、見たという人はいません。いまも生きていたりはいらないのです」。

「僕と叔父貴は、龐徳公の住まいの痕を発見しました。龐徳公は僕等が来ると知って姿を隠しました。その場を去ってまだ日が浅かったのです」。

「それは叔父貴の作り話でしょう。君も笑っていたではないですか。君も先刻承知のことを一応言うだけだけれど、不老長生術は、これまでに幾人もの

偉大な皇帝が、莫大な富と膨大な労力を注いで求めて失敗したではありませんか。秦の始皇帝も漢の武帝もそうでした。我が朝の太宗皇帝だって、不老長生術を願って逆に寿命を縮めてしまったでしょう」。

「そういう噂は聞いています」。

「丹薬を服用されていたのは間違いないそうです。でなければ、戦場を自在に駆け巡っておられたあのお方がわずか五十二歳で亡くなるはずがありません。太宗皇帝が丹薬などにお迷いにならず、普通に天寿を全うしておられたならば、今の世の中も随分と違っていたに違いありません。不老長生への執着が、数十年、百年先にも大きく影響すると、もしも太宗皇帝が知っておられたならば、丹薬をお飲みなるのを思いとどまったに違いありません。そうは思わないですか」。

「そうかも知れません。それに、もしも不老長生術を得たならば、長く生きること以外に何もすることがなくなってしまうそうです。終わりのないのを望むのはつまらないことかも知れません」。

「今度は逆のことを言い出すのですか。終わりなく続くものがないのは、嘆かなければならないものでもないのでしょう。良き日々が終わるのは悲しくとも、終わるからこそ、それが良き日々であったとわかるのではありませんか。不老長生術を得て、ただ生きているだけの日々が積み重なったところで、それが良き日々であると言えるのかどうかはわかりません」。

「悪しき日々が永久に続くのは誰も望みません」。

「そうです。だから、私は言ったのです、山を下りる時が来たと。別に悪しき日々を終わらせるわけではありません。どちらであっても終わるということです。私は、太宗皇帝が不老長生術を求めて早世されたのを嘆きました。でも、いまの世の中の話は、いま生きている者が責任を持たなければなりません。我等に良き日々が巡り来るのを待っているのではないのです。良き日々が確かに来たとわかってから、おもむろに立つ人がいても、私は非難はしません。しかし、私はそうではあってはならないと思っています。いまより遅れてはならないのです」。

「その考えはすばらしいです。君は必ず立派な仕事をするでしょう。鹿門寺の門で別れるべきでした」。

孟浩然は絞り出すように言う。

張子容は顔を改め、

「私は身の程知らずなのでしよう。顔五君と君と私の三人は魏元忠様を手本としてその後が続こうとしました。魏元忠様が亡くなったとの報せに、三人はそれぞれの方角に行くようになりました。鹿門寺へと君が誘ってくれたのは、いくら感謝しても足りません。あのまま家にいたらどうなっていたかわかりません。鹿門寺でようやく落ち着きを得ました。君と鹿門寺で暮らすようになって、お互いの方角が同じではないのは承知していました。魏元忠様は残念な終わり方をされました。一生を通じて貫くのは大変に難しいのでしよう。でも、魏元忠様は立派なお方でした。私たちの前には立派な方々が大勢います。例えば、李膺り ようです。私ごときが李膺のようになりたいと言ったら、誰だつて笑うでしょう。いくら努力しても足元にも及ばないの

はわかっています。だからこそ、李膺のようになろうと思わなければいけないと考えるのです。どうだい、可笑しいだろう」。

「いえ、君こそは李膺にふさわしいと思います。そして、李膺がいても漢朝は救えなかつたと、訳知り顔に言うのは、愚か者の詰まらない言い訳です。志をいかに保つかが大切なのです」。

孟浩然は、きっぱりと友と別れるために、また友を励ますために、そう言つて、胸が苦しくなる。我が名を思えば、自分こそが李膺を目指さなければならぬ。鹿門寺を出て行くのは、張子容ではなくて、自分でなければならぬ。少なくとも、一緒に出て行くのでなければならぬ。

魏元忠は晩年の振る舞いで色褪せたが、李膺は数百年を経てますます輝きを放っている。李膺は、漢が急坂をころげ落ちて行く時代に生きた。漢朝には幼帝が続き、外戚と宦官との間で国家の大権が綱引きされ、どちらが力を得ても、国権は私権によって蚕食され、国家衰亡の皺寄せが民衆を苦しめた。官人のほとんどが外戚に付くか宦官に付くか右顧左眄する中であつて、李膺

は高く節を守り、宦官に憎まれて獄に下された。かろうじて死刑を免れ、帰郷した。孔子、孟子の教えを学ぶ若者たちは李膺に続こう立ち上がり、全土に大きなうねりが広がった。皇帝が交替し、李膺は中央に返り咲いた。李膺はこの絶好の機会に宦官を除き去ろうと計画したものの、事前に漏れて失敗し、李膺は野に下り、再び帰郷した。宦官は追及を緩めず捕り手を派遣し、都の獄に繋ごうとした。「難を辞せず、刑を逃れず」と、李膺は自ら捕まり、刑死した。宦官は李膺の志を継ごうとする者を徹底的に弾圧し、多数の死者を出した。

「希望は常に存在する。そのように思う人がいる限り、希望は希望以上になり得る可能性がある。いまは明らかな兆しがあります。このときに、李膺のようになろうと思う者が、一人でも多く出なければならぬ。だから、私は山を下りると決めた」。

「わかっています。さあ、行きたまえ、僕はここで帰ります」。

孟浩然は力なく言う。

「よき二年間だった。君と語り合った全てのこと、鹿門山であった全てのことを私は決して忘れない。山での日々があったから、今日、こうして下りられたのです。君に感謝します。さあ、ここで別れよう」。

孟浩然はうなだれ、

「永遠に終わらないものがあるとはもう言いません。でも、過ぎ去った日々はそのままにあるのです。君にはこれからの新しい日々があります。僕には何があるのでしょうか」。

「君は私にそれを尋ねるのかい。君は十分にわかっているではないですか。でも、いいでしょう、私に尋ねるのなら言いますよ。いいかい、君には山がある。山には君が一人でいるべきだと、私はずっと思っていました。私のために、私が山にいるのを君は許してくれた。これからは君は一人です。本来、最初からそうあるべきだったのです。さあ、行きたまえ。君はそうしなければならぬ」。

張子容は孟浩然の背を押して鹿門山へと向かせる。

「あそこには君にしかできないことがある」。

孟浩然是一人にならなければいけないと知る。

「では、これで」。

張子容がそう言うって立ち去る姿を見るのは辛く、孟浩然是山を見たままで歩き出す。

漁梁の渡し場に人影はまだまばらだ。舟が出るには間があり、酒店の片隅で船頭が大鼾をかいている。

少し離れた土手に腰を下ろす。すきつ腹では帰りにくいと張子容に言ったが、腹はむしろ重い。体もずっしりと重く、嘆息とともに両手を頬に当てる。頭が膝の間に沈む。息苦しさに、唸り語とともに体を一気に伸ばし、そのまま仰向けになる。淡く青い空が目に入る。その明るさが恨めしく、急いで瞼を閉ざす。

終わらないものなどこの世にない。張子容との日々が終わった。

永遠に終わらないものはないとわかっていても、それに似たものを鹿門山に求めていた。もしも張子容がいなかったならば、鹿門山の奥へ奥へと入って行って、龐徳公のように俗世に戻らなくなっていたらどうか。求めるのは一筋の道であると自分に言い聞かせつつ、顔五の後を追うようなことになっただろうか。一筋の道は自分だけが見た幻でも、神仙の道を辿った先人なら数多いる。

張子容は「君にしかできないことがある」と言ってくれた。それは詩を作ることであるに違いないが、二年の間にこれといった詩は生まれていない。もしもこれぞという詩ができたとして、それで何になるのだろうか。たかが詩に何の意味があるのか。そもそも自分の人生は始まってまだ二十年とわずかだ。謝靈雲や阮籍や陶淵明のように厳しい歳月を生きていない。雲表觀主にはもつと苦しめと言われた。南園の人々が汗水流して作った物を従弟や弟に運んでもらって、山でぶらぶらしているだけの人間に、いったいどのよう

な詩が作れるというのか。張野人は「三十年後になってできる詩」と言っていた。一筋の道は遙か彼方であるか、それとももとより幻なのか。歩もうとして、結局まだ全く歩めていない。

居たたまれない苦しさに、跳ね起きる。

前に川が流れ、向かいに鹿門山がある。いつも通りの風景だ。父のように、ここで鹿門山に向き合ってみようか。詩ができたのはあのときだけだ。

孟浩然是立ち上がりかけて、唸り語とともに再び仰向けになる。

自分は父のようにはなれない。心に何もなしに山と向き合うことはできない。

「舟を出すぞ」。

船頭の呼び声に、ぎくりと体を痙攣させる。

このまま行かずにすませようか。行かなければならない。友と別れたのだ。

孟浩然是立ち上がる。

我先にと争い合って人々が舟に乗り込んでいる。一人の商人が荷を置く場

所を確保しようと躍起になっている。齷齪せねば世間の人は身を保てない。自分だけが何の用事を持たない。最後尾に付いて乗り込む。この様子も、人々の目には悠然と構えていると映るのだろうか。

「舟を出すぞ」

船頭はもう一度叫び、誰も来ないのを確かめて、纜を解く。

いまなら降りられるか。走つて張子容を追い、「僕も貢奉を受ける」と言えば、自分にも立派な用事ができる。それこそが生まれながらに定まっていたことだ。一筋の道などは幻だ。

船頭が棹をぐいと張る。舟は岸边を離れ、ゆっくりと半回転する。西日を受けた水のきらめきが目に入って来て、そして通り過ぎる。

船頭は棹を置いて艀に換える。船頭は自分の仕事を心得ている。川に漕ぎ出したのに艀を流してしまふような船頭の舟には誰も乗らない。南園に生まれた自分が鹿門寺に籠ったのは艀を捨てるに等しい。人々の反対を押し切つて自分は何をしたのか。張子容との楽しい日々をむさぼつただけではないの

か。

世の上に立つ者は、幾万もの人を乗せた船を操る舟長ようなものだ。その舟長の仕事がいかなるものであるかを追究したのが孔子や孟子の学問だ。自分はその習ったのに、孟子の子孫であるのに、活かそうとしていない。

唐という巨大な舟を、鹿門寺に籠り始めたころに操っていた舟長は、皇帝ではなく韋皇后だった。国家の重要な地位が金銭で取引きされた。宰相の崔湜(さいしよく)が、韋皇后やその娘の希望する通りに人々に位を授けた。崔湜自身は金銭とは別の手段で宰相に昇った。色だ。韋皇后が君臨する宮中で絶大な力を持つ上官昭容(じょうかんしょうよう)という女性がいる。崔湜は上官昭容と通じ、思いのままの出世を遂げた。崔湜の出鱈目な人事は、法に照らせば重大な犯罪である。勇氣ある者が崔湜を告発した。上官昭容たちの裏工作によって、崔湜は襄州刺史に転出するという軽い処分ですんだ。崔湜が襄陽に来ると、張子容の父は、このときとばかりにこの大物に接近しようとした。張子容が鹿門寺に籠っていないければ相当に嫌な思いをしただろう。崔湜

が襄陽にいたのごく短い間で、すぐに都に復帰した。

その年は天候不順で、特に都の周辺で稔りが悪く、収穫前から穀物の値が上り、秋から冬に向かうにつれて飢饉の様相を呈し始めた。そのようなときには、危険な状況になる前に、皇帝は百官を引き連れて東の洛陽に移るのが通例であった。洛陽までなら、運河を使って長江下流域の農産物を比較的容易に運搬できる。韋皇后は移動を望まなかった。韋皇后の一族は長安周辺に古くから住み、贅を凝らした邸宅での安楽な日々を続けていたかった。韋皇后は巫術を為す者を宮中に呼び、皇帝の前で吉凶を占わせた。東方への移動は極めてよろしくないとお告げに、「朕を不吉な地に追いやるのか」と、皇帝は洛陽行きを勧める人々を叱責した。翌年の正月は、都の外で餓死者を出しながらも、都の中では無数の燈籠を飾って新年が祝われた。韋皇后は皇帝とともに市中に繰り出して燈籠見物をし、数千人の宮女にも出遊びが許された。そのまま多くの宮女が姿を消した。

五月雨の暗い雲で鹿門山が鎖されたころ、皇帝が急死した。都が恐ろしい

ことになっていると寺僧が噂し合った。雨を衝いて荷を担いで来た孟馨も、いつもと違う陰気な顔で襄陽から流れて来た話をぼそぼそと語った。皇帝は、妻の章皇后と娘の安楽公主によって毒殺されたというのだった。皇后は淫乱で安楽公主等とともに国を危うくしていると、ある者が皇帝に告げた。皇帝は真相を正そうとした。皇后が先んじて手を打った。「あくまでも噂ですから」と孟馨は笑い飛ばそうとした。張子容は「史書を見れば、同様のことが幾度もありました。噂にはそれなりの根拠があるのでしよう」と言った。孟浩然は霍大叔母が「数千年前からずっと同じ」と言ったのを思い出した。唐の世は、陶淵明や謝靈運の時代と比べてよくはなっていないのか。

章皇后は、李重茂（りじゅうも）を皇帝に立て、皇太后としてその上に君臨しようとした。李重茂は毒殺された皇帝の子ではあったが、章皇后が生んだ子ではない。章皇后の実の男児は則天武后の時代に非業の死を遂げていた。

それから間もなく、都で次なる一大変事があった。章太后、安楽公主、上官昭容といった権勢を思いのままに振るった女性が悉く斬り倒された。それ

を成し遂げたのは、則天武后の孫の李隆基（りゅうき）だった。後に玄宗皇帝と呼ばれる人で、このとき二十六歳だった。

鹿門山に盛夏が訪れた。李隆基の登場で、唐は真夏の太陽のごとく強い輝きを一気に取り戻すかに見えたが、事はさほど単純ではなかった。韋太后の傀儡に過ぎなかった李重茂はすぐに退位させられ、代わって李旦が皇帝になった。李旦は則天武后の息子、すなわち李隆基の父である。李旦はかつて則天武后が皇帝になる前に帝位にあつて、全て母の言いなりで、帝位を母に譲った人物である。李隆基が皇帝にならずに、李旦が復位したのには理由があった。李旦の妹の太平公主の存在である。太平公主は母の則天武后に最も似て、かつては母の片腕的存在として政権の中枢にいた。則天武后が皇帝を座から降ろされると、太平公主も日蔭者に追いやられ、長らく逼塞していた。韋太后時代の紊乱から唐朝を建て直すには、若い李隆基にはまだ無理で、実力者の太平公主が登場する必要があると見られた。太平公主は水を得た魚のように目覚ましい活躍をし、矢継ぎ早に改革を実行した。半年ほどは、太平

公主は兄の皇帝を補佐して立派な仕事ぶりであった。自らの力に自信を得ると、母と同じ道を歩み出した。己の意のままなる者を要所に配して権力の掌握を図り、兄の皇帝はもちろんのこと、甥の李隆基もすっかり抑え込んでしまった。

そのような都の情勢が聞こえて来るなかで、来年の春に都で試験を受けるために鹿門寺を出ると、張子容が孟浩然に告げたのは昨日だった。張子容は深く考えて決めたことでなければ口にしない。引き留めるのは無駄とわかっ
ていても、言わずにいられなかった。「いまはその時期ではないのではありませんか」。「他の人が命を懸けて成し遂げるのを、安全な場に身を置いて心穏やかに待つことのできない者がいるというのは、君も否定しないだろう」。張子容の言葉は孟浩然の胸に突き刺さった。自分も心穏やかに待つことのできない者であるのなら、張子容とともに山を降りなければいけない。「いつここを出るのですか」。「明日の朝です」。それまでに自分は決心できないと思っ
た。

今朝になって、「ともに貢拳を受ける」とは言えず、また「山に残る」とも言えなかった。黙って寺の門を出て、このようになった。

「もう着いております」。

孟浩然の肩が叩かれる。

舟中には自分と船頭だけ。商人の荷があと一つ残されている。

孟浩然は腰を浮かそうとしてよろける。

「お帰りはお一人でございますか」。

船頭に支えられ、

「この舟はもう一度向こう岸に行くのかい」。

「へい、それで今日の仕事は仕舞いです」。

「で、いつ出るのかい」。

船頭は向こう岸を指し、

「お日様が、あの柳の木の上のあのあたりにまで来たときでございます。あちらへまたいらっしやるのでございませうか。難しいお顔をされてしまったので、あちらで何かし残したことでもあったのでございませうか」。

「いや、何もない。今日はこれで寺に帰る。向こう岸に渡ることは当分あるまい」。

「張家の若旦那様はお家にお帰りになったのでございませうか。あなた様は南園にお帰りにならなかつたのでございませうか」。

孟浩然は顔をしかめる。

船頭は自分のことを知っているのだった。身を隠そうとまでは思わない。南園老の曾孫であるのだから、それなりに人から見られている。

「山から出るときが来たら出る。それだけのことだ。今日はまだそうではない。それがどうかしたか」。

孟浩然が語気強く答えたので、船頭は腰を曲げ、

「相すみません。立ち入ったことをお尋ねしてしまいました」。

「いや、いいのだ」。

孟浩然は言葉にならないことを口中に呟きながら棧橋に上がる。

張子容とともに貢拳を受けると決めていたならば、いまごろは胸を張って南園に向かって歩いているだろうか。南園は懐かしい。「貢拳を受ける」と告げたらきつと皆が喜ぶだろう。

川を背に、鹿門寺に向かう道を歩み出す。

舟から下りた人々が先に行く。多くは襄陽の町で何かの用事をすませた帰りなのだろう。首尾よくすんで晴れ晴れとした心持ちの者もいれば、重荷をいっそう重くした者もいるだろう。一人一人の背はそれぞれに何かを語るようだ。自分の背はいま何を語っているのか。後ろに誰もいないのは幸いだ。

不意にここに張野人が現れはしないか。「では、行きますかな」。「どこへかい」。「鹿門山ももう飽きましたからな。まずは漢水を下って、洞庭湖に至ってですな、岳陽楼の高みに登って、行くにようさそうなところを見つけますかな。どうせ、坊ちゃんには、さしあたっては何のあてもないでしょう」。

人々は分れ岐ごとに三々五々散って行く。鹿門寺にまで行くのは孟浩然だ一人となる。人々には帰る場所があり、自分には行くべきあてがない。鹿門寺の奥のあそこは帰るべき場所なのか。張子容がいなくてここに帰ってどうするのか。

寺の門に至る手前の最後の分岐点で立ち止まる。日は西に低くなった。もう舟は出ただろうか。いずれにしても襄陽には戻れない。

不意に脇道に入る。他の人々と同じく自分も鹿門寺には行かぬ一人になるうというのか。

道はすぐに急な坂になる。すすると日が落ちて、残る明かりが向かいの山の端を照らす。暮れの鐘が響く。鹿門寺をすつぽりと納める谷は光を失う。

いま引き返せば、足元が見えるうちに寺に入れるだろう。そうしなければならぬ理由はない。

尾根筋を登る。暗かりが忍び寄り、あたりがすつと寒くなる。このまま進もうとしても、闇の中で道を失い、動けなくなつて、身が凍えてしまうのだら

うか。それを避けなければならぬ理由はない。寒い夜をどこで過ごすのがよいのか。鹿門山の方々の道を心の内で辿る。

今日は十七日か。月が出れば歩くに不自由はない。月光のよく届く高所で月の出を待つて、後はそのときの気まぐれに任せよう。

月は、山の端を青白く染めて現れる。峰の木々が黒い影を伴って立ち上がる。月の光は冷たい色であるが、我が身には暖かく感じられる。

空を斜めに月が昇り、谷の底まで明るく照らし出す。鹿門寺の建物が、淡い煙のように見える。あの場所に戻れば、いつもの寢床があり、少々の残り粥がある。寺の一番奥から山に分け入るいつもの道がある。月を頼りに下りて行くのは難しくない。そうしなければならぬ理由はない。今夜からは一人だ。帰るには及ばない。

ならば、鹿門山の奥深くに行こうか。この月に、龐徳公も山を歩いているのではないか。永遠に終わらないものを問うてみようか。

猛然と歩み出す。山中の道は、明々と照らされ、昼間よりも隈なくくつき

りと見えている。我が足は、走るよりも速くに進む。起伏のある道がたちまち後ろに去る。自分は月の光に乗って飛んでいるのだろう。

石が渦高く積まれている。張野人に無駄だと笑われながら積んだ石だ。ここから入ればいいのだ。

岩の壁がある、道しるべが役に立ったではないか。張野人が言うのはいつも出鱈目だ。孟浩然は一人笑い声を立てる。

月の光は壁には及ばず、真黒に聳え立っている。体を岩に付ける。腕を伸ばすと、掴むべき岩角に指が届く。これだ。壁を登る。岩は例の匂いを発している。龐徳公がいるに違いない。

岩壁の上に出ると、再び月の光に包まれる。

「なんだ、叔父貴も来ていたのですか」。

こういうときには張野人がいるものだ。

「御覧の通り、僕はちゃんとここに来ました。二度と桃花源に行けなかった漁夫とは違います」。

孟浩然は胸を張る。

一番の高所に火が揺れる。

「叔父貴の言った通り、やはり龐徳公の竈でした」。

燃え立つ炎が放つ赤い光の輪の中に入って行くと、老人が、小鍋をじっと覗いている。金色の液がぶつぶつと泡を立て、桃の香りがする。

「だから、永遠に終わらないものがあると、僕は言ったのです。ほら、君も見たらいい」。

張子容に言う。

「それは不老長生の薬なのでしょう」。

孟浩然の問いに、老人は小鍋をひっくり返す。金色の煙が高く上がって火が消える。

月の明かりが再び増して、その下へと、木々の蔭から、一人、二人、三人と、山の精が現れ出る。

「今宵はお酒を持って来ませんでした。それでも構わなければ、共に月を愛

「でつつお話をしませんか」。

山の精は踊る。手足の動きに応じて、草も木も動く。

俄かに不安に襲われる。自分はここで何をしているのか。

桃花源は二度とは行けない場所だ。しかし、ここに来られたということは、地上へはもう戻れないということなのか。

「いいのですか、このようなことをしても」。

孟浩然是空に向かって問う。

笑い声が返って来る。

「すでに来ているながら、問うのはおかしいですか」。

自分でも笑う。

山の精は踊り、輪を巡って次第に速くなり、一人一人が見分けられなくなり、ひと連なりの帯となる。ふと見ると、帯の中に自分がいる。

「いいのですか、そのようなことをしていて」。

そう言ったのは、自分なのか、帯の中の自分なのか。

「黙っていないさい。黙っていないと僕には聞こえません」。

そう言ったのは、自分なのか、帯の中の自分なのか。

「いま何を言ったのですか」。

「それがわかれば、言いはしません」。

「一体どうしたのです」。

「わかっているでしょう」。

同じようなことが前にもあつたような気がする。

誰かが立っている。

「興だ」。

父の声がして、月の光があり、孟浩然だけがいる。

これは一度限りのこと。桃花源には二度と行けないのだ。

自分は詩を作らなければいけない。道しるべではなく、桃花源そのものを。

一筋の道を歩み出そうとしつつ、心地よい境目に留まっていたかった。だ

から張子容がいなければならなかった。

詩はまことにはかない。興に導かれてどこに至るのか。二度と外には通じないのか。阮籍が泣いた袋小路か。普通とは異なる心になって歩む道であるのならば、限りを尽くして惑うがいい。

月の下には自分しかない。自分が行くしかない。

■ 夜帰鹿門寺

景雲二（七一）年、孟浩然二十三歳の詩。

山寺鳴鐘昼已暗

山の寺は昼からすでに暗く、鐘が響くところに、

漁梁渡頭争渡喧

漁梁の渡し場では、人々は騒がしく争い合います。

人随沙路向江村

人は沙の路をたどってそれぞれの村に向かい

予亦乘舟帰鹿門

私は舟に乗って鹿門寺へと帰ります。

鹿門月照開烟樹

月が昇って鹿門山を照らすと、煙るような樹木が広

がり

忽至龐徳公隱処

なぜか私は龐徳公の隱棲の場に来ています。

樵徑非遙長寂寥

山の道は遙か遠くではないのにとこしえに寂寥として

唯有幽人夜来去

夜に行き来するのは世に用なき人だけです。

■ 題明禪師西山蘭若

南園より西に見る山の僧院で禪座する明禪師を訪ねた詩。四十代ごろの作であろうか。

西山多奇状

西山には奇怪な形状の峰があつて

秀出倚前楹

僧院の手すりの向こうに美しく突き出しています。

停午收彩翠

昼には山の彩りをそこに集め

夕陽照分明

夕陽はそこだけを明るく照らします。

吾師位其下

吾が師はその下におられ

禪座證無生

座禪を組み、無生を明らかにしています。

■ 送張子容進士挙

先天元（七二二）年の冬、張子容が貢挙の進士科の試験を受けるために
長安に行くのを見送った詩。

結廬就嵌窟

師は廬を結ぶために山の奥を穿ち

剪芴通往行

花を摘むために道を往き来します。

談空对樵叟

樵の親爺を相手に空を説き

授法与山精

山の精に法を授けるのです。

日暮方辞去

日が暮れましたので私は辞去し

田園帰治城

南園の田園へと帰ります。

夕曛山照滅

山を照らしていた夕日の残りが消えるころに

送客出柴門

君を送って柴の門を出ます。

惆悵野中別

野中での別れに思いは尽きず

慇懃岐路言

互いに異なる道を行くともう一度言い合います。

茂林余偃息

私は林の茂みにひっそりと潜み

喬木爾飛翻

君は大樹の上へと翻り飛びます。

無使谷風誚

朋友の道は絶えたと誰が嘆くのですか

須令友道存

私たちの友情は必ず続くでしょう。

■ 永嘉別張子容

開元二十(七三二)年、襄陽を遠く離れた永嘉の地で張子容と出会い、

互いに旅路を異にして別れた詩。張子容の詩も残っていて「君に勧む

旧廬に帰れと」の句がある。

旧国余帰楚

この旧い国より私は西に帰り

新年子北征

この新たな年に君は北に行きます。

掛帆愁海路

帆を掛ければ、船路に愁いがおこり

分手恋朋情

手を分かつてば、朋情を恋い偲ぶことになるでしょう。

日夕故園意

日が傾くと故郷を思う心が湧き出し

汀洲春草生
何時一杯酒
重与李膺傾

あたかも水辺に春の草が生い茂るかのようです。
いつになるでしようか、一杯の酒を
李膺とも言うべき君と次に傾けるのは。